
Blue Wish～truth～

水瀬藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue Wish \ truth \

【Nコード】

N5274A

【作者名】

水瀬藍

【あらすじ】

神々の住まう地、人々の住まう地。創るもの、創られるもの。存在に違いはあっても、交わす想いに違いはない。青く澄み切った世界で紡がれる、いくつかの綺麗な物語たち。時が満ちて零れてしまいう前に、そっと拾い上げてみてください。※現在、休止中です。

プロローグ（Blue）

鮮やかながら薄い色彩で統一された世界——レイアース。

強い原色を見かけるのはまれだが、その理由は『光の国』という名称にある。絶え間なく空から降る輝きは、自然物も人工物も関係なく、幻想的に光を反射して淡い彩りを魅せていた。

光の祝福を受け、闇の存在しない世界。

その加護は精神にも影響を及ぼしている。すべての行動は善意に基づいており、すべての感情は慈愛に基づいている。素晴らしいことではあるが、それは変化に欠しいということでもあった。なぜなら、醜い競争心がないからだ。永い年月を過ごす『ひと』の特性なのだろう。

時空のなか、無数に存在する世界のうち唯一の真実。夢を創り、夢に生きる神々の住まう聖なる場所。わたしは、そんな故郷を——捨てた。

* * *

「——ねえ、ママ」

甘えるように、小さな子供が女の手を引く。

「どうしたの？」

かがみこんで目の高さを合わせると、女は微笑んで娘の頭を撫でた。

「ユメノセカイって、どんなところなの？」

こたえを求めるように、子供はまっすぐに母親を見つめる。

「まあ。そんなこと、誰から聞いたの？」

驚いたように、母親は目を丸くした。

「となりのね、ユウくんがいったの！ たのしいところなんだ、って」

母親の反応に気をよくしたらしく、自然と興味津々の表情に笑顔も浮かぶ。

「そうね……ママもよくは分からないけど……きつと、楽しくて怖いところよ」

想いを馳せるように遠い目をしてから、母親は答えた。

「たのしいのに……こわい、の？」

すこし残念な気持ちで顔を曇らせながら、子供は聞き返す。

「そう。なにが起きるかわからない世界……みえないものは怖いでしょう？」

なぜか期待しているような口調で、母親は娘に笑いかけた。

「うそだよ！ ママは、なんでもできるもん！」

子供は頬を膨らませて、むすっと拗ねるようにそっぽを向く。

「ふふっ。ママにもね、一個だけ出来ないことがあるのよ？」

可愛くてたまらないといった風に娘を抱きかかえながら、立ち上がって母親は言った。

「……なに？」

機嫌を直さないままで、それでも子供は母親の話を聞こうとする。

「夢の世界の未来を知ること」

空を見上げて一言つぶやいた。

「……………」

子供は黙って母親にしがみつく。

「わかるのが当たり前だったけど……わからないって素敵だと思わない？」

歌うように言って、母親は歩き出した。

＊ ＊ ＊

遙か遠い記憶。だけど消えない、大切な記憶。

お母さんが大好きで、一番だった。

そして、ずっと一番のはずだった。

いまでも、きっと一番なのに……それなのに。
ごめんなさい、お母さん。わたしは、夢を見続けていたいんです。

1-1. 真実のはじまり

いつからだろう。

胸の中の「好き」という気持ちが抑えられなくなったのは。

わたしは恋をした。永い時のなかで、初めて恋をした。

はじまりは、もしかしたら罪悪感からだったのかもしれない。

残してきた彼に、よく似た男の子。想いを寄せてくれていた彼。だけど、いまは違う。

わたしは——真雪は、マユキのままで恋をした。

* * *

キーン、コーン、カーン、コーン……。

「よし、解答やめ！ 後ろから回収しろ」

チャイムと同時に試験監督の先生が声を上げ、筆記用具が置かれる音と一緒に、全員がいつせいに溜め息のような声を洩らす。

「終わった……」

あらゆる意味で。

佐藤祐介、十八歳。今年の受験を見据えた、大事な夏——

自分にしては結構がんばったつもりだったが、平均が取れるかどうかというところだろう。教えてくれた彼女に申し訳ない気がする。窓際後方に目をやる。

純血の日本人だというが、珍すぎる銀髪の少女。空を仰ぐその表情は、儚く見えるがゆえに神秘的ですらあって、思わず見とれてしまう。

そのうち俺の視線に気がついた彼女は、口パクとジェスチャーで会話を試みってくる。

『——どうでした？』

俺たちの間では定番の行為だけに解読も容易い。

『ヤバイ、ピンチ』

がっくりと肩を落として出来が悪かったことを伝えると、彼女は頬をむっと膨らませて睨んできた。

『せっかく、教えてあげたのに』

『ゴメンナサイ』

手を合わせて平謝りすると、何か考えるような素振りをしてから彼女はまた「パクチャー」——口パクとジェスチャーを合わせて勝手に命名した——を送ってくる。

『それじゃあ——』

彼女の両手がいくつかの数字を表す。

——六十、一、七。

問題用紙を指差し、何かを口にやる仕草。親指と人差し指で円を作り、にっこりと笑いかけてくる。

「えっと……六十点、ひとつ、七回——試験、飯、金？」

ジェスチャーの解説に成功すると、彼女は口パクで確認を求める。

『ひとつでも六十点以下の科目があったら、ご飯おごりですよ？』

七回くらい』

とんでもない要求に、俺は反論する。

このとき、わけもなく机をガタンと揺らしたため注目を集めたのだが、俺も彼女も気づかなかった。

『なんで七回なんだよ！』

『んと……なんとなく？』

首を傾げられても困る。学生にとっての死活問題であるだけに、譲れない線があった。

『せめて、三回。それ以上は無理』

『中間考査のぶんは？』

痛いところを突いてくる。もう忘れたと思っていたのだが、これは仕方がない。

『足しても五回だろ！』

『……そういえば、バレンタインのお返し貰ってません』

うぐつ。そんな前のことまで覚えてるとは——痛すぎて何も言い返せない。

考えるフリをしてそっぽを向き、恐る恐る視線を戻すと、ジト目で恨みがましく見つめてくる彼女がいた。

『あー、七回な……ワカリマシタ』

交渉材料がない。いやむしろ、これ以上つづけたら増える気がしたので、了解する。

頭のなかで財布の中身と相談をはじめた俺を、彼女はくすくすと笑って見ていた。

「——もう、いいのかしら？」

頭上から降りかかった声に顔を上げると、担任の女教師が苦笑いを浮かべながら俺を見下ろしていた。どうやら、ずっと観察されていたらしい。中間考査のときも同じことをやったというのに、俺たちは懲りないなあ。

「校舎内、恋愛禁止。外でイチャイチャしてね」

先生のからかいに教室が沸く。そのなかで彼女——姫宮真雪は、真っ赤になって恥ずかしそうに俯いていた。

「祐介くん、帰ろ」

「ああ」

ホームルームの終わった教室で、真雪が寄ってくる。

「お前らはホント仲いいよなあ。さっさと、くつついちまえばいいのに」

友人のひとりが冷やかすように言うが、俺も真雪も苦笑するだけだ。いままで何度となく言われてきて同じように返していた。

俺はともかく、真雪の反応はよくわからない。

純真無垢といった感じの彼女の性格なら、さっき先生にからかわれたときのように照れて顔を赤くすると思っていたのだが、何故か哀しそうな色を交えて、困ったような笑みを向けてくるのだ。

俺は真雪のことが好きで、自惚れかもしれないけど——真雪も俺

のことを好きでいてくれるはず。

だがそれでも、お互いに踏み出せない理由がある。だから、ぬるま湯のような心地よい関係で満足してしまっている。それはきっと仕方のないことで、無理に秘密を暴いて友達以上恋人未満の関係を壊そうとは思わないのだった。

1-2. もう、時間がない。

「もう……夏ですね」

「ああ、そうだな」

学校の帰り道。俺と真雪は、寄り添うように肩を並べて海沿いを歩いていた。

寄せては返す波の音。青空を飛び交う海猫たち。人気の少ない町並み。この街に来て、はや一年半。ようやく慣れてきた、のどかな田舎の風景が広がっていた。

「祐介くんは……夏休みの予定とか決まっていますか？」

前を見つめたまま、真雪が聞いてくる。その声は、夏休みが楽しみな調子ではなく、なにか心配事があるような——上手くはいえないが、そんな感じだった。

「いや、どうだろうな。誘われれば遊びにも行くと思うけど……今年を受験だしな」

「そう、でしたね……」

まるで他人事のように、真雪が呟く。そのおかしい態度が気になつて、俺は足を止めた。

「……………」

気づかずに一人で数歩進む真雪。ようやく振り返ったときには、もう十メートル近く離れてしまっていた。

「どうした？ さっきから、おかしいぞ」

早足で追いついてから、いたわるように声をかける。

校門を出るまでは、いたって普通だった。だが、周りに知り合いがいなくなつて二人きりになったときから、目に見えて不安そうな様子を見せるようになった。

「なんでもないです……大丈夫」

自分に言い聞かせるように、真雪はうつむいたまま答える。

ふたたび歩き出した俺の少し後ろを、黙って真雪がついてくる。

気まずい雰囲気だが、何を聞いても無駄かもしれないと思った。前にもこんなことがあったから。

彼女の家まで送り届けて、その日は真雪と別れた。
いつもの「バイバイ」という挨拶が「さようなら」になっていたことにも気づかずに。

* * *

「――そんな格好で何してんだ？ 風邪ひくぞ」

街の全景と水平線を一望できる丘。

そこに一人の少女がいた。薄いブラウスにスカートという冬景色には似合わない格好で、雪が舞う灰色の空を――その向こうの何かを、澄んだ瞳で一心に見つめていた。

「雪を、見ていたんです」

明らかに寒いはずなのに、身体は震えていない。まるで、感覚がないかのように。

振り向かずに答えたつきり何も語ろうとはしない少女に、俺は近づいていつて着ていたコートを羽織らせる。

ふつう、見も知らぬ他人にこんなことはしないだろう。たとえば、相手が美少女でも。だが、俺のいた場所では普通のことだった。

助け合う。支えあう。笑顔の絶えない、優しいところだった。それは皆が、命を大切に使って、精一杯、一生懸命に生きているからかもしれない。

「なぜ、ひきますよ？」

感謝する様子もなく、自分のことを棚にあげた発言で、少女はようやく振り返った。ただ、その手はコートの襟を握っていたが。

初めて見る、銀色の長い髪が揺れる。日本人には珍しすぎる色で、しかし凜とした顔立ちは整って、和人形のように美しかった。

綺麗に澄んだ瞳が俺を見つめた、その瞬間。

「……ユウくん？」

驚きの色が表情に現れる。だが、眩きは冷たい突風にかき消されて届かなかった。

「何か言ったか？」

動いた口元を見て、俺は聞き返す。けれど、少女は首を振って言った。

「気のせいです。私は帰りますから」
そっけない言葉。

去り際、コートを脱いで俺に返す。そして言った。

「……ありがとうございます」

これが、俺と真雪の出会いだった。

この田舎の高校を受験するために、親戚の家に居候させてもらっていた俺の、もっとも印象に残った人が彼女だった。春になって、同じ高校の同じクラスになったときは驚いたものだ。

初めて会ったときの彼女は、もっと物静かで――いや、そんな言葉では片付けられないほどに他人を寄せ付けない異彩なオーラを放っていた。去年から彼女を知っているやつは皆、その変わりぶりに驚いていることだろう。

* * *

「ただいま」

誰もいない家に、俺の小さい声がやけに大きく響いた。

受験が終わって、無事合格が決まったあと、俺は両親と親戚一同に一人暮らしがしたいと申し入れた。見知らぬ土地での孤独、それだけでなく俺の身体を氣遣って猛反対した親戚たちだが、両親はあっさりと認めてくれた。

それは別に淡泊なわけではない。俺自身、深く愛されてきたことを感じていて、感謝もしている。親は子のことをよく理解している、それだけのことだ。

靴を脱いで、たたき上がる。

「ちっ」

思わず舌打ちが漏れた。

膝がかくんと折れ、慌てて壁に手をついて重い体を支える。

壁伝いにキッチンまで向かうと、食器棚に置いた薬瓶から二錠ほどカプセルを取り出した。それを常温で放置——もとい、保存してあるミネラルウォーターで流し込むと、すこし人心地ついた。まだおぼつかない足でリビングに行き、ソファに倒れこむ。

とくんとくん。うるさい鼓動を聞きながら、光の届かないカーテンを引いた真っ暗闇の中に佇んだ。

俺の罹っている病気——原因不明の難病。原因だけでなく正体も不明。過去の症例がないという病気。

急に何かが起きるわけではない。ただ、徐々に。本人も気づかないうちに身体を蝕んで、一步步つ死への階段を歩ませる。

いまのところ問題はない。それぞれの症状に適する薬を処方してもらい、どうにかごまかしながら抑えている。

だがそれも、果たしていつまで保つか。抵抗力が落ちているせいか、風邪をひきやすくなった。体育の授業が辛くなった。

確実に俺の命は削られている。

俺には時間が——ない。

1-3. おとぎ話

終業式の朝。集会のために体育館へ向かう列の中で、真雪がパクチャーを送ってきた。

『十六時に、屋上で』

『どうしてだ?』

今日は集会が終わったなら、ホームルームだけで解散だ。昼前には帰ることが出来るのに。

『……秘密です』

口元に人差し指を当てて、柔かく微笑む真雪。楽しげな、哀しげな、そんな複雑な表情をしていた。

夏休みの生活指導や受験生への激励など、お決まりで退屈な校長の話聞き流しつつ、俺は真雪のことを考えていた。改まったの話とは一体なんだろうか。

全く内容が想像できない、わけでもない。良すぎるほどに仲がいい、俺と真雪。だが、お互いに身の上話をしたことはなかった。

可能性としては、このごろ体調を崩しがちな俺への詰問。または真雪自身の謎に対する回答。

まさかとは思うが、告白なんてことはないだろう。馴れきってしまった二人には、恋心を打ち明けるようなきっかけがない。

教室に戻ってからのホームルームが終わったのは、正午を少し過ぎたところで、校舎の中は次第に閑散とし始める。気がつくとも真雪は消えていて、俺は独りで取り残されていた。

* * *

「真雪……」

小さく呟いた俺の声に、いや屋上の鉄扉が軋む音に気づいて、少

女が振り返る。彼女の表情には、淡い微笑が浮かんでいた。

夕刻とはいえ、真夏の近い空はまだ青く、果てしなく澄み広がっている。視線を空に戻した真雪の横顔に、一瞬あの冬と同じ感情を抱いたのは何故だろう。

空の向こう側を見つめるような遠い目。それが、とても哀しそうに見えたのは――

「綺麗だよね」

フェンス際に立ち尽くす真雪に歩み寄ると、ぽつりとそんな言葉が投げかけられる。

「この世界の空って、いろんな表情を見せてくれる……漆黒の夜、月と星々、白銀の雪景色、茜色の夕焼け、晴れ渡る蒼穹。あたりまえに在るものだけれど、それって奇跡のひとつかけらだと、そう思いませんか？」

「……そう、かもな」

真理を辿る真雪の言葉。普段は考えもしないことだが、彼女の口から出たものなら、いまは自然と頷けた。空へと伸びた真雪の腕は、神秘を抱いているようでさえあった。

真雪は静かに佇んでいるだけで、用件を語り始める気配がなかった。何か予感のようなものを感じて、覚悟を決めて俺は彼女を促す。「話があるんだろ？」

「……はい。聞いて、くれますか？ 遠い世界のおとぎ話を――」

――むかしむかし、天空に築かれた水晶のお城に、美しいお姫様がいました。お姫様は民のために、生れた日から永遠を眠る運命を背負っていました。しかし、せめてもの思い出にと地上に降り立ったお姫様は、そこで恋をしてしまいます。天空のお姫様と地上の青年。二人の恋は、許されないものでした。けれど、心の奥深くに積もる温かく切ない想いは、溶かすことが出来ないので。青年と結ばれたい、そう願ったお姫様は、天空に帰ると身近な人々に訴えました。

「どうして私は、囚われていなければならないの？」

「どうして私は、眠っていなければならないの？」

しかし、誰も本当のことを言おうとはしません。古いしきたりで決まっていることだからと、口を噤みます。天空には秘密があったのです。後に、お姫様は秘密を知ることになるのですが、重すぎる秘密に我俣を通すことが出来ず、苦しんでしまいます。どうしようもなく悩んだ末の選択肢は、たった二つ。自分ひとりの幸せと、世界みんなの幸せ。天秤にかけることなど不可能な選択です。結局、お姫様は地上の青年と別れて、泣きながら天空へ戻ったのでした――

真雪が紡いだ物語は、それこそおとぎ話のような、途方もなく夢想的なものだった。だが、表情は深い哀しみで色取られていて、彼女にとっては真剣なことなのだと分かる。

「――お姫様が幸せになるには、どうしたらいいの？ 青年と結ばれるには、どうしたらいいの？ ねえ、どう思いますか？」

突拍子もない話に混乱しながらも、真雪の必死な様子に触発されたのか、俺は真面目に答えを探していた。単に状況に流されているだけかもしれないが、自分なりの答えを見つけなければいけない。そう、思ったのだ。

「あー、いまいち理解できてないんだが……お姫様が困ってるなら、男が天空に行って助けてやればいいんじゃないのか？」

「えっ？」

「何でもかんでも、一人で抱え込むことないだろ。秘密だって、共有すれば少しは軽くなるだろうし。何か出来ることがあるかもしれないし」

驚きの表情で目を見開いて、真雪は俺を見つめていた。そんなに意外だったろうか。確かにおとぎ話とは縁遠いかもしいが、普通の回答だと思うのだが。

「そっか……ありがとう」

「どう、いたしまして？」

感謝されるようなことは何も言っていない。感じたままを言葉にしただけだ。それでも真雪は、何故か嬉しそうに笑っていた。

「えへへ。用はこれだけです」

「訳わかんねーよ」

「わかんなくていいですよ。聞いて欲しかったただけだから——それに、答えを貰えたから……勘違いでも思い込みでも良い。希望が欲しかったただけだから」

独り言のような呟きは、俺の耳まで届かなかった。

「何か言ったか？ よく聞こえなかった」

「……なんでもないです。先に、帰ってもらえますか？」

「え？ あ、ああ……」

突然のお願いに戸惑う余裕さえなかった。そっとしておいたほうがいいのかもしれないと思い、素直に背を向けて立ち去ろうとする。

「それじゃあな」

「——祐介くんっ！」

振り向いた俺に、真雪が何かを告げる。

「————」

瞬間、屋上を吹きぬけた一陣の風にさらわれた真雪の言葉を、俺は聞き取ることが出来なかった。

ただ、彼女の胸の前で祈るように組まれた手が、やけに印象に残って脳裏から離れなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5274a/>

Blue Wish～truth～

2010年10月28日08時31分発行